奈良県・韓国ゆかりの地紹介

第一弾　　飛鳥寺

奈良は古代から韓国と深い繋がりがあり、今も奈良県内には日韓交流の痕跡と見られる場所が多く残されています。昔、韓半島から日本に渡り、土器製作、農工技術、土木技術、機織り、漢字、仏教などの新しい文化や技術を日本に伝えた人たちを「渡来人」と呼びます。特に、4 世紀から 7 世紀には高句麗、百済、新羅、伽耶から日本に渡ってきた「渡来人」が多くいました。「渡来人」は、7 世紀の飛鳥文化の形成に大きな影響を与えたと言われています。

今年は、奈良県と韓国忠清南道が 2011 年に友好提携を締結して 10 周年を迎える記念の年です。これから奈良県内にある奈良と韓国とのゆかりの地、特に忠清南道とのゆかりを中心にご紹介します！

飛鳥寺は、日本書紀によると、588 年に蘇我馬子（そがのうまこ）が建立を発願し、596 年に完成したとされる日本最初の本格的仏教寺院です。飛鳥寺の建立には、百済から派遣された僧侶や仏師、寺工、鑪盤博士、瓦博士が携わったという記録があります。

また、日本最初の本格的伽藍（がらん）配置によるお寺と言われています。飛鳥寺の伽藍配置は、塔を中心としてその東・北・西に金堂を置く様式です。この配置は、高句麗の清岩里寺址（チョンアムリサジ）、上五里寺址（サンオリサジ）、定陵寺（チョンルンサ）、新羅の皇龍寺址（ファンリョンサジ）などで見られる様式です。

飛鳥寺の本尊である銅造釈迦如来坐像（飛鳥大仏）は、7 世紀初期に渡来系の仏師「鞍作止利（くらつくりのとり）」により造られた日本最古の仏像です。

飛鳥大仏

飛鳥寺入口（正面）

修徳寺（韓国忠清南道礼山郡）

写真提供：忠清南道

現在、飛鳥寺は 1987 年から韓国忠清南道礼山郡の修徳寺（しゅうとくじ）と結縁し、姉妹寺院として交流を続けています。

実際に飛鳥大仏を見ると、造られて 1400 年以上経っている今も、同じ場所で飛鳥を見守ってくれている気がしました。また、飛鳥寺の建立や飛鳥大仏の制作に携わった昔の人の優れた技術に感動しました。

（奈良県国際交流員　南　炫汀）